

# 2020年度 須磨学園夙川中学校入学試験

## 国 語

### 第 4 回

(注 意)

解答用紙は、この問題冊子の中央にはさんであります。まず、解答用紙を取り出して、受験番号シールを貼り、受験番号と氏名を記入しなさい。

1. すべての問題を解答しなさい。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 字数制限のある問題については、記号、句読点も1字と数えること。
4. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

学校法人 須磨学園 夙川中学校

※この冊子は再生紙を使用しています。

【一】 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

この本のなかで私が焦点を当てる「自己防衛の戦略」とは、自己の内面や他者、現実の社会生活と距離を置くための措置<sup>注1</sup>です。私がこの本で「自己防衛の戦略」という言葉を使うときは、毎回、この措置をサ<sup>a</sup>すと考えてください。

自己防衛の戦略の具体的な例は次のようなものです。

ハンネはシユウシヨク面接で落ちてしまいました。【Ⅰ】悲しくなりましたが、悲しみと向き合う気力がすぐには湧いてきませんでした。そこで現実を忘れるため、家でスリラー映画を観ることにしました。こうして現実と距離を置き、休息をとることができました。

ハンネがその後どこかの時点で、悲しみと向き合い受け止める時間と機会を見つけ、再び100%今を生きられるようになれさえすれば問題ありません。

ところが厄介な感情にタイシヨするの<sup>やっかい</sup>に用いられる戦略が現実と距離を置くことしかないとなると、話は別です。ハンネはリラックスして自分の感情と向き合う時間を取り、心の平穏を取り戻す必要があるのです。

そうすることができないと、永久に自己と距離を置きながら生きることになり、ストレスを感じ、生きる活力を失いかねません。

自身の感情と自ら距離を置いてしまったと本人が認識していないのなら、問題は改善されることなく、【Ⅱ】深刻化してしまうでしょう。

自己防衛の戦略のほとんどは、幼少期の早い段階でとられるようになり、この戦略は、困難のさなかにいる小さな子どもがとれる手段のなかでは最良のものです。ところが子ども時代の危機と近い状況<sup>じょうきょう</sup>に大人になって陥ったときに、無意識にこの戦略をとるようになったら、どうでしょう。

具体的な例を示します。

インガーの母親は彼女を育てているとき、苦況にあり、自身の痛みをインガーにしょっちゅう伝えました。幼いインガーにとって、それを聞かされるのは苦痛でした。子どもは大人の苦しみを受け止めきれませんし、保護者が困っているのを目の当たりにすると恐怖を感じるものです。【Ⅲ】インガーは幼いながら、母親の注意を別のことに向けるため、まったく別の話題を切り出すという戦略をとるようになりました。

大人になり母となったインガーは、子どもたちが困ったことがあっても、自分に話してくれないのはどうしてか不思議に思うようになりました。子どもたちに理由を尋ねると、「話したことはあるけど、毎回、話題を変えられちゃうんだもん」という答えがカエってきました。

子どもとの会話を録音し、後から聴いてみたインガーは、近しい人の危機や悲しみを感じたり耳にしたりするたび、話題を変えたいわけではないのに、変えてしまうことに気づきました。

そのような※を知らず知らずのうちにとることが、深い人間関係を築く妨げになることがあります。

かつて自身の精神の健康を守っていた行動パターンが、現在、子どもとの信頼関係を築く障壁となっていることを認め、見つけることではじめて、彼女は先へ進み、自身の戦略を変えられる選択ができるのです。

(イルセ・サン『心がつながるのが怖い』による)

注1 措置……状況に合わせた行動をとること。



## 二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

五十歳を過ぎた母が、自転車に乗れるようになりたいと言い出したのは、この街に引っ越してきてからだだった。その頃、我が家ではいろいろなことが大きく変わろうとしていた。長年勤めた会社を辞めて独立した父が、この街で新しい事業を始めたのだ。それまで住んでいた家売って事業資金に充て、わたしたちは父の会社の近くに小さな部屋を借りて住むことになった。

住み慣れた土地を離れ、生まれてから一度も行ったことのない場所に住むというのは、なんと心細い気持ちなのだろう。引っ越す部屋を最終的に決めるといふ日、両親と弟と四人で、初めてこの街に下り立った。電車が大きな川を渡ると、窓の外の風景は突然なじみのないものになった。新しくできた駅の、まだコンクリートの色が白いプラットホームに風が吹き抜けていった。

引っ越した翌日から、目まぐるしい日々が始まった。母は父を助けて經理の仕事をするため、夜間の經理学校に通いながら、昼間は会社とともに働いた。朝早くから夜遅くまで、ふたりは働き通しだった。弟はすでに独立して一人暮らしをし、わたしも深夜まで残業して帰らない。家族の姿を家で目にする機会は急速に減り、両親と話をする時間もほとんどなくなっていた。

ときおり交わす朝食の会話の中で、母の通う經理学校や父の会社が、家から自転車で行かれる距離であるということをとんとなく聞かされていた。自転車があればねえと、母は言うともなしによく呟いた。そしてある日、ついに自転車を買ったと告げられたのである。

「ええっ、もう?」

わたしは驚いて言った。

「だって、練習を始めなくちゃ」

「ちよっと待ってよ。危ないわよ。やめたほうがいいんじゃない。バスだってあるでしょう?」

「バスは遠いもの」

乗ってしまえば、バスのほうがずっと早い。

「そりゃそうだけど、パパと一緒に行きたいのよ、自転車二台、連なって」

母は嬉しそうだった。

道端の雑草にうっすらと土埃が積もっているようなこの街の中で、家のすぐ近くにある細長い公園だけは唯一、心和む空間だった。公園といつても、グリーンベルトに近いようなものである。服を着替えると、わたしは部屋の窓を大きく開け放ち、公園の方を眺めた。葉を青々と茂らせているあの木の下あたりで、母は父に助けられながら細い道を行ったり来たりして自転車を練習しているはずだ。

「いいか、まだだぞ、しっかり前を向いて!」

小学校三年の夏休み、家の近くの公園で自転車を練習した。父の声が背中から飛んでくる。荷台をしっかりとその両手で支えられて、自転車は辛うじて立っていた。

ギョツとハンドルを握り締め、グイと前を見つめた。よし、いまだっ。掛け声とともに強くペダルを踏み込んだ。ざざっと父の運動靴が土を蹴る音がする。【Ⅰ】おぼつかない動きで、自転車は前に進み始めた。

怖がらないで、もっと漕いでスピードを出せっ。ダメダメ、手の力を抜かなけりゃ。そう、大丈夫、押さえているからな、転ばないからな。そうだそうだ、いいぞ、頑張れ。必死でペダルを踏んだ。

手を放さないでっ、絶対放さないでよっ。

大声で叫びながら百メートルほど先のイチョウの木に向かって突進する。どうにかこうにか木の下まで行き着いても、今度は方向転換がまた大変だ。ペダルが足から離れそうになり、そのたびにハンドルに力が入って右へ左へ【Ⅱ】曲がりそうになる。怖い。

腕の力を抜いてっ。緊張した背中に父の声がかかる。

ようし、思いきって力を抜くぞ。

するとペダルは一気に早く回転するような気がした。そして次の瞬間、ふわりと軽くなった。うわあ、どんどん行く、どんどん行く、お父さーん。

振り返ろうとして、はっと気がついた。いま一瞬、目の端に飛び込んできたあの人影はなに? まさか……。自転車は再びイチョウに差し掛かった。木の陰に、手を腰に当てニコニコしながら立っている人がいる。お父さんだ、手を放したんだ!

そう思った瞬間、わたしは自転車ごと横倒しになって地面に滑り込んだ。

したたかに股を打って泣きじゃくりながら、乗れたんだよ、もも子ひとりで走れたんだよ、と言う父の声を聞いた。

「わたし、乗れたの……?」

涙の下から恐る恐る問うと、そうだよ、もう支えなしで乗れるんだよ、と答える笑顔が目の前にあった。

後ろで支えてもらっているときの、振り返りたくてもそうしてはいけないような、ちよっと心細いような気持ち、それでいて温かい安心感に包まれたような気持ち。母もいま、臙脂色の真新しい自転車がまたがって、緊張に顔を紅潮させていることだろう。

明日は自転車で出勤できるだろうか。

(光野桃『実りを待つ季節』による)

## 二の設問

問一 「なじみのない」(——線部a)、「目まぐるしい」

(——線部b)について、正しい意味で用いた例文として最も適当なものを後から一つずつ選び、番号で答えなさい。

a 「なじみのない」

- 1 祖父の葬儀にはなじみのない顔がたくさんあった。
- 2 洗濯したのでなじみのないきれいなシャツになった。
- 3 誕生日にはなじみのないプレゼントをもらった。
- 4 友人がなじみのない返事をしたので驚いた。

b 「目まぐるしい」

- 1 遊園地で遊びすぎて目まぐるしい気持ちになった。
- 2 この一年は目まぐるしい変化の連続だった。
- 3 道にごみを捨てるのは目まぐるしい行為だ。
- 4 山頂からの眺めは目まぐるしい景色だ。

問二 「新しくできた駅の、まだコンクリートの色が白いプラットホームに風が吹き抜けていった」(——線部ア)とあり

ますが、これは「わたし」のどのような気持ちを表現していますか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 引越した翌日から始まる忙しい日々を想像して、焦っている気持ち。
- 2 長年勤めた会社を辞めて、この街で新しい事業を始めた父を応援する気持ち。
- 3 住み慣れた土地を離れ、新しい街に住むことを心細く思う気持ち。
- 4 両親と弟と四人で、初めてやってきた街のさわやかさに期待する気持ち。

問三 「自転車があればねえと、母は言うともなしによく呟いた」

(——線部イ)とありますが、ここからわかる母の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自転車があれば、もっと街のあちらこちらを探検することができるのという気持ち。
- 2 自転車があれば、父と一緒に通勤することができるのという気持ち。
- 3 自転車があれば、葉を青々と茂らせた公園を走ることができるのという気持ち。
- 4 自転車があれば、もっと遠くの街まで出かけて行くことができるのという気持ち。

問四 「やめたほうがいいんじゃない」(——線部ウ)とあり

ますが、「わたし」はどのような気持ちで言っていますか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 会社の仕事や夜間の経理学校に加えて自転車の練習までしたら母が疲れてしまうのではないかと心配する気持ち。
- 2 家族で食事をする時間もないほど忙しいのに自転車に乗る余裕などないはずだと母を心配する気持ち。
- 3 五十歳を過ぎた母が自転車に乗ったりしたら、ケガをするのではないかと心配する気持ち。
- 4 道端の雑草の土埃を自転車が巻き上げて母の自転車が汚れてしまうのではないかと心配する気持ち。

問五

【Ⅰ】【Ⅱ】に入る語として最も適当なものを後からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

- |         |           |
|---------|-----------|
| 1 とぼとぼと | 2 ぐるんぐるんと |
| 3 よろよると | 4 ころんころんと |

問六

「次の瞬間、ふわりと軽くなった」(——線部エ)とありますが、なぜですか。その理由を説明したものととして最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 お父さんがしっかりとつかんでくれているから。
- 2 お父さんが荷台をつかんでいた手を放したから。
- 3 自転車をこぐわたしの足の力が強くなったから。
- 4 わたしの足がペダルから離れなくなったから。

問七

「明日は自転車で出勤できるだろうか」(——線部オ)とありますが、この時の「わたし」はどのような気持ちだったのでしょうか。本文の内容をふまえて、七〇字以内で答えなさい。

